

退官によせて

田代邦雄

私は昭和39年に北大医学部を卒業、横須賀米国海軍病院にて1年間のインターンを修了後、母校北大医学部に昭和40年4月に独立したばかりの脳神経外科講座（都留美都雄教授）に入局いたしました。学生時代より神経学に興味をもち、将来もそれを専攻したいと夢を抱いていましたが昭和39年～40年は日本で初めての神経内科が九州大学、次いで東京大学、新潟大学に独立したばかりという時期でありました。そこで都留教授にご相談したところ神経内科をやるには先ず北大の脳外科において研修、そして2年したら米国へ行き神経内科を専攻するよとと言うアドバイスを頂いた訳であります。都留教授は米国に5年半にわたり留学され、日本人初の米国脳神経外科専門医の資格を取得されたばかりでなく、その間の1年間を当時の米国神経学の最高峰ともいえるハーバード大学系のボストン市立病院神経内科デニー・ブラウン教授、フォーレイ準教授のもとで神経学、神経病理学も学ばれておられる日本の神経学のパイオニアの一人でありました。そして2年後の昭和42年6月に、当時クリーブランド市のウェスタン・リザーブ大学（現ケース・ウェスタン・リザーブ大学）に移っておられたフォーレイ教授のもとに留学、神経内科レジデントを3年、続いてセントルイス市のセントルイス大学神経病理ネルソン準教授の最初の弟子として神経病理レジデント2年と計5年間の在米生活をおくったのち昭和47年7月に帰国しました。札幌オリンピックを境に大きく変貌をとげた札幌で、浦島太郎のような心境とともに、北大脳外科の中で“神経内科診療班”を作らせていただき、診療と、脳外科の学生講義の一部で神経学を担当いたしました。そして大学の枠をこえて、次々と集まってきた神経内科を学ぼうとする仲間とともに苦楽をともにしながら、母体である脳外科教室の都留教授さらには二代目阿部弘教授を始め、多くの医学部・診療科の諸先生の支援も受け、ついに昭和62年神経内科診療科「北海道大学医学部附属病院神経内科」として独立することができました。脳外科の中で“神経内科診療班”としてスタートしてから実に14年かかったこととなります。さらに医学部講座への昇格を目指して教室員が一丸となって努力した8年間の診療・研究・教育の実績が認められ、診療班結成より22年後の平成7年4月に「医学部神経内科学講座」となる事ができました。そして現在では北海道大学の大学院化にともない大学院医学研究科脳科学専攻・神経病態学講座・神経内科学分野として今日に至っ

ております。神経内科は英語のNeurology に当たり、私が学生時代の北大での神経学関連の講義は、内科学の一部、精神医学の一部、そして脳外科（当時は精神科・脳神経外科診療班）によってなされていました。この頃の北大の神経学に関する組み合わせは米国のNeurology にほぼ一致し現在のclinical neuroscience に相当するものであったと言えます。また私が北大にもどり神経内科をするに当たっても母体の脳外科ばかりでなく、精神科、内科の関連の教授の皆様が神経内科を如何に位置づけるかの協議をされたと同っております。私共の歩んできた時代は、臨床講座になるためには、先ず診療科を作り、その実績を基に講座化を達成するという過程が必須であり、その間は着実な実績を積み重ねることは勿論であります。それを認め、応援して下さる医学部・附属病院・事務部各位、さらには講座申請を文部省（現文部科学省）へ挙げて頂くには大学本部のご尽力がなければ達成できない事でした。脳外科より二つの有給ポスト（講師、助手）をお借りし、そして研究室も第4研究室（4研）を与えられ、外来は脳外科が手術日で使用しない水と金曜日の2日を神経内科外来日として診療を開始した当時の外来患者（新来）数は、昭和48年は僅か100名前後、以降その存在が知られるにつれて鰻登りに増加し昭和55年からは年間1000名を越える新患数となり、また学生教育、研究も着実にすすみ、主要病院に神経内科を設置していただくことで社会的にも貢献し、診療科、講座を経て、現在は大学院医学研究科脳科学専攻の神経内科学分野として揺るぎない立場を築いております。定員は教授1、助教授1、講師1、助手1と僅か4名であります。非常勤講師、医員、研究生、大学院生とともに活発な活動を展開しています。教室同門は短期研修者を含めると120名を越え、また学会専門医試験としては最難関とされる神経内科専門医を60名以上輩出し、学会活動はもとより、神経疾患には所謂“難病”が多いことより厚生省（現厚労省）の多くの研究班に所属し活動をしています。平成11年には第11回日本神経免疫学会、平成12年には第18回日本神経治療学会、第35回脳のシンポジウム、そして平成14年には第43回日本神経学会総会を主宰、また厚生省研究班としては最も長い歴史と伝統があり、椿忠雄班長が初代、以降豊倉康夫先生、中西孝雄先生、萬年徹先生、柳澤信夫先生へと引き継がれてきた筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病などを中心とする「神経変性疾患研究班」の班長を平成8年度から2期6年間務め平成14年3月で任期を全うする事が出来ました。北大神経内科の今までの歩みを振り返ってみたときに、時に恵ま

れ（時）、最適の研究の場を与えられ（場所）、そして最高の人々と巡り会えたこと（人）に感謝している次第です。平成14年5月の日本神経学会総会での会長講演「時・場所・人と神経学」はその総決算でもありました。最後になりましたが、北大神経内科の今までの歩みを御高覧頂き、今後の更なる発展の為のご指導・ご鞭撻のほどを心からお願い申し上げます、退官のご挨拶とさせていただきます。 _

{田代邦雄教授退官記念業績集（2003年6月17日発行）より}